

## 大正 六年 美術界回想

——最も印象の深かった事——

黒田清輝

今年は例年と較べて私は非常に美術界から遠ざかつてゐた。年の始めから父が病氣になり、引續いて遂に歿したりしてそれが爲家事の繁忙を來たしたので、美術界から遠ざかつたのみならず、自分の製作も殆んど出来なかつた。漸く公務だけを如何か斯うか果して過ごして了つた位の有様である。唯文展に就ては、例年の如く鑑別審査の事を仰せつけられて、その事に従事したから、美術界に就ての印象と云へば、文展の事を擧げるより外材料がない。

偕その文展の事に就ては、其當時、雑誌新聞等に個人としての感想も述べて置いたし、又あの時の事はまだ幾らも時日が經たず、諸君の記憶に新しい事であるから、今更ら繰返して彼れ此れ述べ立てる程の事もあるまい。然し折角の註文で、深く印象に残つた本年中の出來事のうちの或物を述べよとの事であるから、文展に就ての事柄の中で最も深く印象に残つてゐる事を重複を顧みず一言だけ述べて置かう。

それは他でもない、文展の鑑別審査に就て、一つの方針が定められた事である、これ迄に文展の開かれる事既に十回にも及んでゐるが、其都度私共審査員に心得として大臣から申し渡しになる事は重に公平に事務を執れと云ふ事に過ぎなかつたのである。然るに今年は大正の訓示が稍細い所に迄も及んで、文展に陳列する事を許すべき性質のものとは斯様々々のものであると云ふと迄申し渡しになつた。斯う云ふ例は従来は明示されなかつた事なの

で我々審査員に取つては一つの方針が定つたと云ふべきであつた。此事は文展の歴史上大いに重視すべき事であらうと思ふ。此れだけは深く自分の印象に残つてゐる。一言にして云へば、此方針の定つたと云ふ事が、嘗に文展に於てのみならず、美術界全體にも此處に一つの新紀元が出來たやうなもので、今迄の十回を第一期とすれば、今年以後は即ち其第二期の發展を來す可き第一歩であると言へやう。而してこれが動機となつて其處に新しい何物かゞ生れるならば、我が美術界に取つて大いに喜ぶべき事と言はなければならぬ。(談)

『美術旬報』二四七 大正六年二月二九日